

「妻との競」にしろのノート

ある事実

週末、病院に母を送る。週一の当番だ。一日おきの人工透析が始まって五年。これまでは妻と子ども二人が交代で送っていたが、年金生活に入った私が、今度ローテーションに加えられた。

9時にタクシーを呼ぶ。運転できない私だけの特権だ。車からみる団地の風景、駅への道はもう人どおりがない。都心からはなれた当地のラッシュアワーは2時間前にすぎている。

「今頃、会社で新聞を読み始める時間だな……」

ドサッと郵便受けに刺さった新聞の束やファックスに食いついている時間だ。新鮮なニュース、ネタをあさる緊張と喜びの時間だ。

「オーイこの論文どう？。新しいこといってるようだけど。企画になるかな、取材してみる……」

出社してくる若い編集マンに、掴んだばかりの情報をぶつけて挑発する。なんともいえない充実したときである。敵もすばらしい情報をもってきている。昨日の座談会で

柳沢 明朗

ㄨ

② 知った話。そこでだされた必読の新刊本や論文。出版社の朝は情報の確かめあいと交換、企画化への火花が咲く時だ。いまタクシーのなかには、まるでリズムがちがう。違いすぎる時の流れと速度。ムダなことをやめてるのか？。

「それにつかまりな……」

車に乗るたびごとに母はいう。窓きわについている把手を指さす。マダラボケの母なりに、送ってもらったことへのささやかな感謝のつもりかもしれないが、急に腹がたってくる。

「いつも同じこと言うな。人のことより自分のことをちやんとやれ……」

5年前、突然、言動が狂ってきて一週間の命と入院先で宣言された母。腎臓が機能してないのが原因ということであった。

94.9.3

11月25日

「人工透析をしなければ一週間です。でもこの治療は大変高額ですから、社会復帰して働くことができる人だけ行つたてまえになっています。だから通院してもらうことが前提です。いまの危機をこえたら退院して通院することができませんか。透析ははじめたら死ぬまでつづけなくてはなりません……」

良心的なこのドクターは、この治療の建て前が、サッチャー首相の政策で、60歳以上は一切透析をしないことになっているのだとか、レーガンも同じだとかと必死に説明してくれる。

バンドラの箱——小さな事実のなかに凝縮したもの

とじこめられたものをくみだす作業

「80年代は小粒か？書き手が現実とぶつからない？」

⑤ 「ボケだけでは入院できないのか？ うまい方法はないのかね？」

病院がちかづく。

④ 「殺す気か……」急に母が哀れに思え怒鳴ろうと思つたが医師の誠実さだけ落ち着いて話し込んだ。通院を約束して透析が始められた。

家族にまかせばなしで5年すぎた。気づいたら妻が真っ暗な顔になり、鬱病になっていた。ヒマワリおぼさんと近所の子どもらにいわれて明るく活発だった日々から想像できない事態であった。息子たちから太陽が沈んだと責任を問われ、いま送りのローション入りした。

いささかあわてた私は、社会保障・社会福祉の関係者のネットワーク、知識を総動員してみたが、打つ手はない。専門の編集長も、制度の欠陥、不十分な制度の説明しかできないという。

家族の一人が倒れただけで、ニッチモサッチモできないところにおいこまれる。たとえ大黒柱でなくてもだ。

「障害者のタクシー券つかってもいいですか」

病院に近づくと運転手さんに聞く。以前「障害者保障制度のすべて」を刊行したとき、全国の自治体での障害者の補償制度を特集したことがあった。各地での交通機関の保障などの到達点を集めた実用辞典だ。

でも、私は何となく現金払いでないことを恥じるように

肩身がせまい。

「おれの権利意識もこんなところか」と自嘲がわく。

さて、こんな送りの日に気になることが起こった。現代における事実のとらえかた、表現をめぐる朝日のノンフィクションについての連載である。

沢木耕太郎、大下英治、中森明夫、柳田邦夫らの5人のすてきな評論である。賛成するか否かを別してするどい興味深い問題提起であることは間違いない。

「社会が安定感をもちながら、複雑になってきた。世の中が見えにくくなってきた。それが、論ではなく事実をもって語らしめるといった手法を求めたのでしよう」と柳田はいう。

「戦後50年の平和で日本人は生きる危機感が薄らぎ

「死に方」が難しくなってきた。……もっとも切実なの

⑦が命の問題になってきた」

「70年は次々とテーマ開拓。支流は“大テーマ”。権力、技術、女性といったように。80年代は新しいテーマの傾向。死、闘病、心身障害のような個人的なテーマが浮上する。そして素人の手記が台頭する」

「書き手が現実とぶつからなくなってきたのではないか」と、ある時代の象徴として語られるようなプロの作品がない原因をいう。「打率はさがっていないが、ホームランがでなくなった。佳作はコンスタントに登場する

⑧の

が……」と。この点は、他の作家も「社会の矛盾とか対立とかが入ってこないせい」という仕方では指摘する。

上記の「個人的テーマ」は、時代の象徴でないのか。……  
事実は現代、とりわけ80年代の「現実」なのだが、ただ作品がないといっているのか。個人の命の運命、その存在の仕方のなかに凝縮された事実の断片に、たとえば世界一の経済大国の社会保障、福祉にみられる人間の扱い方に、時代をとく大テーマがあるのではないのか……など次々に疑問が湧く。

病院通いのわずらわしきや家族に生じたしんどい事実が初体験だから、大問題、大事実になったんだとばかりいえない気がする。

ちっぽけな個体、事実のなかに現代社会、時代の本体がたっぷりひそんでいる、問題はそれを引き出す自線、切取りかたにあると思えてならない。大作家の指摘とちがって、80年という舞台は、まさに「大テーマ」つづきだと思っただが、私が大作家の評論の読み間違っているのだろうか。時代・事実の把握、接近の仕方が違うあるいは、根本を問われているのではないか。

II ① IBMのリストラルポの西会員の報告はなにが欠けていたのか。なにを透視、体現しなくてはならないのか。P IBM問題定義。それもみえる。

マクロー化、Micro化、おくれの遅く、コンピュータへの  
マンモス化、Ref 三池、金銀!.....

② 沖電気の整理解雇

真空管、トランジスタ、IC...技術革新に伴う労働の質、労務管理  
各段階の理念、口実(解決の)

解決がけならいつの時代でも同じ。歴史、時代、背

景を背負わない事実(幽霊)。(感想)

中身

P は『マルチメディア組織革命』

80年代の時代のとらえかた(柳田ら)

に関連するが、電電ファミリー再編。

電電民営化(80年のキーワードの1)

労働運動=労働基本権・国家論。

国鉄は国家の血管、電電は国の神経

民営化なしにマルチメディア時代なし

P 179.

情報革命のありかた、とらえかた

「技術はそれを使う文化が育た

なければ定着しない」。271P

思考の道具論

民主、自由、自由  
の権力社会  
づくり。

深のレポート  
みよ。

頁は『ルポルタージュを書く』(鎌田 慧 169頁-171頁)

「ルポルタージュは、現代という時代を解明するのに、ひとつの素材や人間をてがかりにして切り拓いていく作業です。.....取材してきた事実、それは取材者の「事実」でしかもしれないが、その「事実」の構成によって現実が凝縮したものとしてみえてくる(凝縮した事実を選択、発見し、おしくらまんじゅうして濃縮度を高める作業をどうするのか。その能力を身につける、だれと、どのようにして。情報の把握、アクセス、形成=私)、そういう方法だと思っんです(169p)。

.....結局ルポルタージュは、いずれにしても、現代社会をたんに生産量とか、情報で書くのではなくて、そこに住んでいる人間の生活を軸にしてかいていくことになり

ます。(なぜか。現代社会における人間存在を究極に明らかにするものだ。それは現代における人間の扱い方に=その事実、たとえば現代社会における情報疎外の事実・実態に今日の時代、社会、人間本体、生活と労働などが凝縮されて体现されているから=沖電気の解雇の各ケースをみよ。私)

……人間を描くといっても、最近ふえてきているのは、昔あった事件の関係者を描くことですが、そのところで、昔の話と現代がどのようにつながるのかという視点が弱い。つまり、現代を描くために昔あった事件や出来事や昔の描くことではなくて、とにかく昔は昔でこういうことがあったというのを作品化しておわってしまっているようです。だから、歴史がそこで切れてしまっている。一方、現代の情報の問題とか科学の問題も、現代で切れてしまっている。……現代から描いてもいいし、過去から描いてもいいのだけれど……現在の動きのなかから未来がかわっていくというその先をみたい。変えることに参加したい。そういう方向にむけたものを読みたいし、書いていきたい。ひとつの事実が提示されて、世界観を変えてしまうようなもの、そんなルポルタージュを期待しています。(「……を描くのではなく、でえがく」。ソーゴ・ショウシャはなにを、どう描いたか。80年代はのっぺらか。円高に凝縮された世界の不況状況。経済構造……時代をまさに体现。(一億総投資狂乱社会=土地・株本位性時代、NTT株引き金。金の先物買い作品。沖の各段階での解雇で、情報産業、情報社会のきかた、質、本体を残せないか。3作品をいまの時点できちんと修正加筆して再録する提案。上田・加藤・浅利(11/22/05/200))

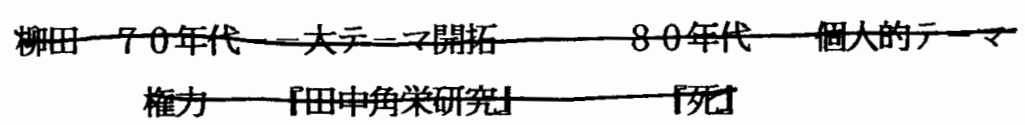
まじ。  
が描いたのか  
→ 逆に見るべき  
11/27/10/0

戦争体験の継承、いまなぜ沖繩か。歴史認識の形成=私)

ういじ

それでもだめだ。その人間のつか<sup>み</sup>見方がどういうものか、たとえば生活者の目線、日常の地平でまで提起せよ(今崎発言。では、同じく生活、日常の目線でなにが描けるのか。なぜか。どんな事実があげられるのか?。討論)

Ⅲ 時代区分とキーワード=事実、事件がおどる舞台。事実<sup>に</sup>背負わせる質、中身にかかわる問題。



柳田	70年代—大テーマ開拓	80年代—個人的テーマ
	権力 『田中角栄研究』	『死』
	技術 『マッハの恐怖』	『闘病』
	女性 『サンダカン八番館』	『心身障害』

中森 60年代の学生運動 石を投げたり棒を振り回したり、哲学書  
(世界のリアリティーに触れる) 読んだりして「世界」に触れようとした

70年代以降、かれらの世代が、路上から文章の中に撤退しながら、もう一度「世界」に触れようとしてあらわれたのがノンフィクションだった。

80年代にはリアリティーのありかたは徹底的に変わった。

地球の<sup>か</sup>で<sup>な</sup>起きている戦争に同時刻で接しながら  
ご近所の<sup>な</sup>火事も新聞やテレビのニュースで確認する  
ようなメディア空間が浸透し、バブルへと上がりつ  
める高度消費社会の中であって物事の確固とした根  
拠は揺らいだ。

#### <資料>

特に日本型企业社会の形成過程、機能、とくに競争の質と修正提案。

もの中で生じている、人間存在をみる。10号、10周年。

時代区分とキーワード+沖電気争議年表+79~89年年表

90年 後藤論文+渡辺治著書&論文。ここから創れ。

日本列島改造計画 小沢。

とりわけて、90年保守革命(後藤論文)。80年代との画期と共

通性。(60~70年代国会、政治と比較)  
なぜ?という。

#### IV 民文座談会での提起の中身を深める—事実を把握する、表現する方法の追究として

事件でも日常でも、生活者の視点、人間等身大の視点が重要になり、従来、  
小粒とみた素材や切り口が重要になります

大企業労働者の生き方から子どもの生活、そして「妻たちの思秋期」へと、  
生活者の質を視点到すえる齊藤茂男の方向性。事実を描くルポから、事実で世

